

【追悼】

広田純会員を偲んで

伊藤陽一*

長きにわたって経済統計研究会（学会）の運営に関われ、研究上の貢献をされた広田純会員が、2011年1月9日に狭山市のあさひ病院で心不全にて逝去された。享年85歳であった。大学退職後の1992-93年度に学会代表にもなられたが、やがて健康を害してお姿をみせなくなった。この追悼は当初、氏と同時代の会員と著そうとしたが、結局、筆者のみの執筆となった。筆者は、広田氏と三瀧氏は学会創設以来1990年代半ば過ぎまで、学会の理論と運営両面の実質的支柱であったとみている。数か月内に、お2人を見送ることになったのが残念でならない。

実は、広田氏の退職時の（1992）『立教経済学研究—広田純教授記念号』第45巻第4号に、氏自らの巻頭論文とともに略歴と業績が掲載されている。更に菊地進会員が「広田純先生の人と学問」として広田氏の研究経過を丁寧に跡付けた解説（以下菊地解説と略称）が掲載されている。以下、年譜はこの号から抜粋し、菊地解説を補う形で広田氏の業績と活動を示し、思い出を添えたい。

1. 年譜

氏の経歴は以下のとおりである。

1925年10月21日に誕生。/1942年4月 第一高等学校文科乙類入学 /1944年9月 同校卒業 /1944年10月 東北帝国大学理学部数学科入学 /1946年3月 同大学退学 /1946年4月 東京大学経済学部経済学科入学

/1949年3月 同大学卒業 /1949年4月 同大学大学院特別研究生 /1954年3月 同大学院修了 /1955年4月 立教大学経済学部講師 /1967年4月 同大学助教授 /1955年4月 同大学教授 /1975年4月 立教大学経済学部長兼大学院経済学研究科委員長 /1991年3月 同大学を定年退職 /1991年6月 同大学名誉教授。

2. 研究と活動等

氏の研究の経歴は波乱に富んでいる。1944年10月から東北帝国大学数学科で学んだ後、1946年に東京大学経済学部に入學し、新カント派の科学方法論、近代経済学と統計学を学び、大学院で統計学を専攻する。菊地解説の区分は、【Ⅱ. 推計学批判から社会統計学へ—(1)統計の闘い、(2)統計論争と「経統研」の創立、(3)推計学批判から計量経済学批判へ、Ⅲ. 基礎理論の研究へ—(1)国民所得統計の批判、(2)国民所得の範囲をめぐる理論的問題、Ⅳ. 社会統計学としての旗幟を鮮明に—(1)国民経済計算の研究、(2)統計の利用と統計解析、(3)統計学の課題をめぐる】である。詳しくは菊地解説を参照いただくことにして、別の切り口からの特徴を指摘したい。

第一に、詳細な実証研究と抽象度の高い経済理論研究による広い分野への目配り、がある。数学から出発し、推計学の代表論者の1人である増山元三郎氏や近代経済学の代表的論者の講義を聴き、研究会への参加にはじまり、推計学の経済学への適用としての計量経済学に山田耕之介氏と共著で鋭い批判を投げた。氏の研究の出発時の推計学や近代経済学

* 法政大学名誉教授

〒192-0912 八王子市絹ヶ丘2-37-8

を脱したのである。計量経済学導入初期のこの批判は、計量経済学検討の重要文献として今に至る。筆者の周囲でも当時広く精読されていた。氏には、一方に、当時手作業で時間多消費的な連関表からの剰余価値計算等の統計的実証研究、他方に高度に抽象的・論理的考察を必要とする国民所得論、生産的労働論や「利子生み資本と信用」論研究がある。他に類をみない幅のある研究であったと思う。

第二に、その論議は、科学・理論の課題にひきつけたものである。『統計学の未来』での氏の論議は、氏の考察・検討のスタイルを示して際立っている。ひとつには、イデオロギーや実用性に流れない科学・理論の見地であり、他の参加者の意見を厳しくいさめている感がある。二つには、その具体化として、対象が方法を規定する、という原則を貫いている点である。この書物の第2章の全数調査や実用性をめぐる論議は、実用性（これを、氏は現実の問題として使用を認めながら）と根本の理論枠を峻別すべきことを指摘している。参照に値するだろう。

第三に、氏は、計量経済学批判や標本調査論争に関する論議を継続せず、具体的分析を進めつつ統計利用の方法を追求した（菊地解説、p.207）。上杉インタビューで、氏は「『統計・日本経済分析』…は、マルクス主義の立場から、統計指標の体系化をめざしたものだと思いますが、ああいうものとして初めて、SNAと同じ次元で対決できるんですね。集団論だけでは、とてもSNAとけんかにはならない」（p.310）という。積極的提起の必要性の指摘である。

第四に、国民や労働者にとってそのときに重要な具体的問題に取り組んだ。（1954）『統計の闘い』への協力、（1955）黄変米輸入批判、（1973）『月刊金属労働資料』統計批判シリーズへの参加、（1989）「鉄道統計の時系列解析」、（1992）「太平洋戦争におけるわが国の戦争被害」等である。氏は地方統計家と

の懇談会を一定期間主催していたことも付け加えておきたい。

第五に、統計制度の統計学への位置づけに関しては、拡大社会科学方法論説といったところだろうか。この項には筆者の誤読があるかもしれないが、以下ようになる。ヴェスロー、イエーツ、ランゲ、ソ連続論争をめぐり、多様なテーマを手がけていた氏には、この点での論議はない。しかし、（1973）「統計学の現状と課題」、（1976）『統計学の未来』、（1979）『大月・経済学辞典』、（1982）「マルクス主義と統計 — 上杉正一郎先生の業績 —」を通じてみると、社会科学方法論説に立つて方法を手段と限定し、この手段を規定する論理と社会的制約のうち、後者を重視する中で、階級性やこれに連なる制度を含めようとしていたように見える。氏は、制約をもつ（統計）「を批判的に利用する。その批判の観点を出してくるというのが、僕は統計における科学の課題だと思うわけですね」という。そして対象が方法を規定するという徹底した見地から、社会集団を前提し、「数量的分析は、分析を方向づけ、また分析結果を説明する原理をもっていない。この原理は、対象の理論的分析によってのみ与えられる。…統計解析の数量分析と対象の質的側面の分析とを結びつける必要がある。…」という。氏には、山田耕之介氏の抑制した表現、「もじって言えば、経統研の統計学として、何か『蜷川統計学』学みたいなのが横行している」傾向を避けて、統計利用論の積極的展開に努めていたからなのかと思う。

筆者には、以上の取り組みが社会統計学の研究であり、また社会統計研究者なのだと、氏が身をもって示したように見える。

3. 学会運営での貢献

(1)研究会発足後の体制の整備 多彩なメンバーによる発起を得て出発した経済統計研究会は、紆余曲折を経て、機関誌の発行が産業

統計研究社に落ち着く過程で軌道に乗った。この初期の事務的支えは、関西や北海道と関東の協同から関東中心に移行した。蜷川門下の強い影響下で、厳しかった松川七郎氏や労働問題研究者や政府統計家など様々な立場の人の多かった関東で会全体のバランスをとったのが、木村太郎氏とこれを支えた三瀧氏と広田氏であったように思う。

(2)記念号第1号の企画と指揮 1976年3月刊の「社会科学としての統計学—日本における成果と展望—『統計学』創立20年記念」には編集委員会代表・木村太郎氏の挨拶があるが、この号は、関東支部の三瀧氏と山田耕之介氏の知恵を借り、各支部の協力と関東支部の後進の事務担当を得ながら、広田氏の陣頭指揮によって完成した。ワープロはもちろんコピー器械もない中で、薄紙方眼紙への鉛筆手書きを青焼きしたものが支部間を郵送往復した。広田氏は、他人に委ねることなく、方針案など重要文書を作成していた。筆者は側に居て、この先生はこういった作業を厭わないのだと強い印象を持ったものである。この記念号は内外の評価を得て2刷りに至り、計3600冊を配布し、以後10年毎の記念号の軌道を敷いた。

(3)経済統計研究会（経統研）から経済統計学会へ 氏は、1984年の全国研究総会時に「研究会」を「学会」に変更するときに、全国運営委員会のまとめ役で、会員総会の議長を担われていた。学会化賛成と学会化反対の意見があり、反対者には、あえて学会とする場合でも「社会経済統計」名でなければならぬという意見が、氏に近い有力な会員に複数以上いた。氏も、総会前には「社会経済統計学会」を考えておられたと推察する。総会前日の運営委員会から経過は複雑だったが、氏は2日目の再開総会で、「(運営委員会としては)経済統計学会の承認か、これへの強い異論がある場合には来年送り。(昨日)異論を提出した人も…危惧がどこにあるかが伝えられた

ということで、再度の異論提出は控えるということにしていただければありがたい」とのかなり強い提案をし、異論なしで総会決定となった。学術会議会員経験者と若い層とともに「経済統計学会」案を支持していた筆者は、全体動向の判断と決然たる座長ぶりは広田氏ならではであり、氏だからこそ異論は出なかったと考えている。印象深い収め方であった。

4. 寸鉄人を殺す—思い出とともに

氏は1981年の上杉氏のインタビューをリードされ、1991年10月に出版された『追想 上杉正一郎』の追悼文集刊行会世話人代表を担われた。上杉氏に深い敬意をはらっておられたと思う。文集のあとがきで、「戦中・戦後のあの激動の時代を、マルクス主義の不屈の闘士として生き抜かれ、その後も変わることなく、一貫した姿勢で研究と活動の生涯を送られました。私たちは、社会主義の崩壊が言われる今日こそ、上杉先生の生涯の記録を、後世に残すことが必要だと考えました」と書いた。また内海氏への弔辞では、代表運営委員として、「物事を根本的に考えるということはどういうことかについて…多くのことを教えられた」と述べた。広田氏も闘士であるとともに、研究では根本に立ち入る科学的気風を強く持っていた。

他方で、氏は、国民経済計算に関する(1969)『文献目録』づくりや、記念号第1集、上杉追悼文集等々、表には出ないで下積みの作業を多く手掛けられている。

筆者のみるところ、氏は些細なことには聞せず、クールに相手の言い分を聞いたうえで、ときに皮肉めいた言を交えながら「寸鉄人を殺す」発言をされていた。見透かされている気もして、近寄りたがうようにも見えながら、酒が進むとともにうちくだけて、面白がっていることがあった。一言ひとことを傾聴したものである。研究者であった夫人が病に伏さ

れてからはその世話にあたったし、先立たれた後は好きな酒にも弱くなった。数々の光景が思い出される。

氏には単著はなかったが、考え抜かれた、また大変な統計の収集・整理に基づく深みのある論文を残された。この研究の経過に、菊地解説のいう氏の姿勢 — 「研究課題は社会の

側から与えられる面があるということをしばしば強調された。そして、何のために研究しているのかの軸をしっかりとさせねばならないとも。」が浮かび上がる。これが、広田氏が理論的にも精神的にも、敬愛されて、長きにわたって会の支柱となった理由の1つだろう。深く哀悼の意を表したい。